

日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触 —— 日本に住み、働きつづける日本留学経験者 B の場合 ——

How the Contact with Japan Appears in the Trajectory of Life of a Japanese Language Learner: Case Study of Ex-Oversea Student B Who Keeps Living and Working in Japan

丸山千歌・小澤伊久美
MARUYAMA Chika, OZAWA Ikumi

〔要旨〕

昨今留学による学生の移動が世界規模で盛んになり、日本社会は多くの留学生を迎えているが、2018年は入管法の改正が決まり（入国管理局、2018）、今後日本社会は大勢の外国人を迎えることがより明確になった年となった。その中で、日本への留学や日本での日本語教育が果たす役割と可能性を考察するには、日本留学を経て母国の大学を卒業し数年以上経過している日本留学経験者自身が、日本留学体験・日本語学習体験をその人生の中でいかに位置付けているか、またその位置付けがどのように変容しているか（またはしていないか）を通時的な視点で捉えることが有効である。そこで、本研究は、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業してから日本に住み、英語教育に従事して働き続けることを選択して数年以上経過している元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを考察する。

Key word: 日本留学、日本語学習、卒業後の進路、日本社会との関係を維持、きっかけ



1. はじめに

昨今留学による学生の移動が世界規模で盛んになり、日本社会は多くの留学生を迎えているが、2018年は入管法の改正が決まり（入国管理局、2018）、今後日本社会は大勢の外国人を迎えることがより明確になった年となった。その中で、日本への留学や日本での日本語教育が果たす役割と可能性を考察するには、日本留学を経て母国の大学を卒業し数年以上経過している日本留学経験者自身が、日本留学体験・日本語学習体験をその人生の中でいかに位置付けているか、またその位置付けがどのように変容しているか（またはしていないか）を通時的な視点で捉えることが有効だと考えられる。

そこで、本研究は個人別態度構造分析（PAC分析法）（内藤、2002）と、人間の文化的発達を非可逆的時間と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記述するための方法論的枠組みである複線径路・等至性アプローチ（TEA）（安田・サトウ、2017）を組み合わせ、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業し、日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過した元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを分析し、より広い視座から日本語教育・日本語学習を捉える重要性を提案する。

2. 先行研究

本研究は学習者要因を通時的に捉えることを試みた研究である。学習者要因とは、第二言語習得において学習者間の違いを生み出すと考えられる原因のことである（JACET SLA 研究会、2000：45）。日本語教育学会編（2005：710-711）は、この学習者要因の下位分類を三つ、すなわち①「学習者要因」：年齢、適性、動機・態度、学習ストラテジー・スタイル、性格、情緒、母語、性別、教育経験など、②「学習環境要因」：(a) フォーマル（教師特性、教師教育・養成、教師経験、教授法、教材、教育機関、時間数、他の学習者など）、(b) インフォーマル（目標言語との接触、目標言語話者との接触など）、③「社会文化的要因」：社会・心理的距離、ステレオタイプ、文化変容とカルチャーショック、民族的アイデンティティ、母語の保持、リテラシー、多言語・多文化との接触、多言語・多文化社会に対する態度、バイリンガリズム（マルチリンガリズム）への期待、言語政策、社会階層など、に整理した。また、それぞれの要因が複雑に関わり、相互に作用して、第二言語習得過程における個人差を生み出していると説明している。

日本語教育では、文野他（2006）が一人の日本語学習者を取り巻く様々な要因を捉える試みがあり、また、日本の高等教育機関に留学したインドネシア人の大学研究者らが、20年前の日本留学とその後のキャリアとをどのように捉えているかを捉えた有川（2010）などがある。

一方、丸山・小澤（2011a）は、日本語学習者が日本語教材とどのように向き合うかという観点から、PAC分析法を用いた縦断研究を行っており、そこから学習者要因に関する研究を行っている。前掲論文では日本への留学前の留学経験の有無が、日本語学習者の主体的な読みを促す

一つの鍵となることを示し、丸山・小澤（2011b）はこれに加えて、ステレオタイプの教材の読み取りは留学をすることだけでは変わらず、むしろ留学中の接触体験の深さと新味が、日本語学習者の批判的な視点を持った、主体的な読みを促す鍵になるということを示した。

また、丸山・小澤（2018）は日本語学習者が自らの人生選択において日本語学習をどのように捉えているかを考察している。研究手法はPAC分析法とTEAを複合的に活用したもので、日本での1年の留学を経て大学を卒業し、フルタイムの翻訳者として日本で働くことを選択して数年以上経過している元日本語学習者Aが、現在の選択に至るには日本語学習が欠かせないものとして位置付けていること、母国や現地の友人とのつながりや、留学先の大学職員からの仕事の依頼など、調査協力者の人生の様々な時点での出来事が、日本語学習の動機を高め、調査協力者が自身の将来を考えるきっかけになっていることを明らかにした。TEAでは、対象者を1人、4±1人、9±2人のいずれかにすることが推奨されている（安田・サトウ、2012）。この理論に基づき、本研究は、Aとは異なる選択、具体的には日本での1年の交換留学を経て大学を卒業してから日本に住み、英語教育に従事して働き続けることを選択して数年以上経過した元日本語学習者Bを対象に、丸山・小澤（2018）と同様に、PAC分析法とTEAの両方を活用して分析を行う。

3. 方法

3.1 調査協力者の概要

調査協力者は現在国内のある多文化共生の実現を目的に掲げる機関で英語教育の分野で期限付きの教育研究職の仕事にあたりと同時に、大学院にも通学している日本語非母語話者（以下、協力者B）である。今後も日本・日本語と関わりながら生活を営む意思を持っており、その属性に係る概要は表1の通りである。米国の大学でCommunication Studiesを専攻し、交換留学により日本に1年滞在し、大学卒業後に再び渡日して現在に至る。インタビューは対面で3回行った。

表1 協力者Bの概要

出身地	ベトナム
年齢・性別	30代・女性
職業	英語講師、大学院生
日本語学習歴	小学校のときに米国に移住し、中等教育を経て大学に進学し、日本語学習を開始した。1年の日本への交換留学を経験する。卒業後、日本の私立高校に常勤講師、専任講師として勤務し、日本の大学院に進学が決まる。それと同時に多文化共生の実現を目的に掲げる機関で英語講師を務めている。非漢字圏。
母語	ベトナム語
インタビュー実施時期	1回目：2017年11月23日（約1時間半） 2回目：2018年3月25日（約1時間半） 3回目：2018年6月2日（約1時間半）

3.2 インタビュー方法

本研究は、丸山・小澤（2018）と同様に PAC 分析法と TEA を複合的に活用する。具体的には、協力者 B に同意を得た上で筆者らが 3 回インタビューを行った。まず 1 回目は PAC 分析インタビューの手法で、2 回目は TEM 図を作成するためのインタビューを、3 回目は TEM 図を確認するためのインタビューを行った。

PAC 分析法は、自由連想に基づくインタビューで、インタビューの元となる連想語が「調査協力者の自由連想によって出されるため、調査協力者は調査者が想定しなかった項目も提示することが可能」であり、そのため、調査項目の設定の自由度が各段に高い、また調査協力者が中心となるという特徴がある（丸山、2016: 364）。

丸山・小澤（2018）は、インタビュー実施者と協力者とが、インタビュー実施者の協力者に期待するストーリーを共同で構築するリスク（佐藤、2015）を、PAC 分析法を活用することで低減する手順を踏んでいる。本研究も同様の理由から、TEA を研究手法の主軸に据えつつ、PAC 分析法を組み合わせることとした。

PAC 分析で使用した刺激文は「『わたしと日本語』と聞いて思い浮かべるのはどのようなことですか。あなたが思い浮かべたことを言葉やイメージで表してください。書くときには思いついた順に、順位の番号を付けてください。」である。

4. 結果

4.1 PAC 分析インタビューの結果

PAC 分析インタビューは内藤（2002）の手順で進め、協力者 B は 64 の連想語を挙げた。統計処理は、重要度順に並べた各連想語の非類似度評定を SPSS version20 を用いて階層的クラスタ分析にかけるといった手順をとったが、その結果描画されたデンドログラムを図 1 に示す（左の数値は各連想語の重要度順位である）。各連想語と重要度順位、印象、4 つのクラスターの名付け、全体のクラスターの名付けは表 2 の通りである。

PAC 分析インタビューで、協力者 B はこれを 4 つのクラスター（以下、CL）に分けることに同意し、各 CL を次のように名付けた。重要度順 38, 61, 24, 26, 8, 23, 25, 16 の 8 項目から成る CL1 は「伝統的な日本」、同 59, 62, 60, 21, 31, 20, 11, 33, 2, 58, 12, 15, 5, 10, 22, 46, 29, 35, の 18 項目から成る CL2 は「普段の生活」、同 44, 45, 43, 38, 19, 18, 9, 27, 36, 37, 14, 34, 28, 30, 13, 42, 32, 41, 1, 4, 50, 56, 17, 39, 3, 7, 6 の 27 項目から成る CL3 は「Interaction with Japanese people」、同 40, 57, 47, 53, 55, 54, 49, 52, 64, 51, 63 の 11 項目から成る CL4 は「How I became interested in Japan.」、そして CL 全体を「Why I love Japan」と名付けた。

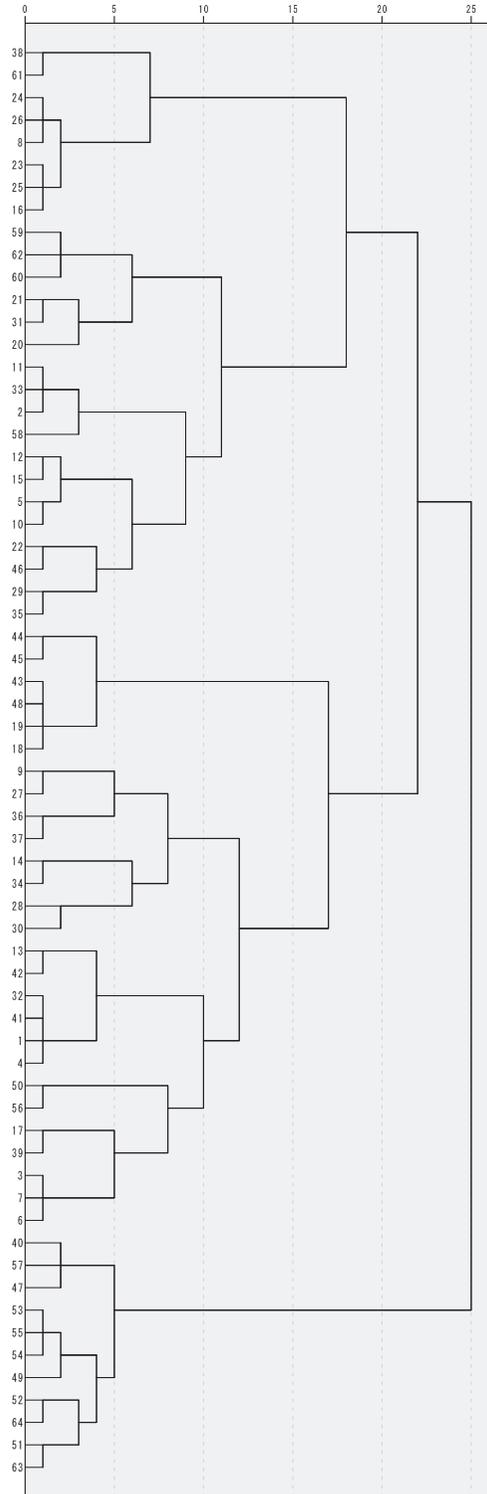


図1 調査協力者Bのデンドログラム
(表左の数字は、連想語の重要度順の番号)

表2 調査協力者Bの連想語と順位、印象、およびCLの名付けの内訳

CL	重要度	連想語	印象	
CL全体: Why I love Japan	CL1: 伝統的な日本	38	Japanese tea ceremony	+
		61	Japanese food and Buddhism	+
		24	Kamakura	+
		26	Japan tour guide	+
		8	Japanese "teien" (strolling gardens)	+
		23	traveling to "anaba" places	+
		25	Sankeien Garden	+
		16	hot springs	+
	CL2: 普段の生活	59	"shoku repo" programs	+
		62	Hard-off & Book-off	+
		60	Japanese cookbooks	+
		21	Food in Japan is the best!	+
		31	7-11 Japan	+
		20	Beef tongue teishoku	+
		11	My adopted home	+
		33	Living in U*	+
		2	V*	+
		58	Daiso	+
		12	A place where I can be myself	+
		15	not gaining weight	+
		5	convenient public transportation	+
		10	Comfortable place to live	+
		22	my personality fits with Japanese culture	+
		46	Love!	+
	CL3: Interaction with Japanese people	29	Fashion in Japan	+
		35	Japanese fashion magazines	+
		44	Zip!	+
		45	variety shows	+
		43	learning kanji thru watching TV	+
		48	I like kanji even though it's difficult	+
		19	JLPT 1	+
		18	I want to speak keigo better	0
		9	Japanese temples & shrines	+
		27	Japanese have a good impression of Vietnam	+
	36	"You look Japanese!"	+	
	37	wearing yukata & kimono	+	
	14	hard-working work ethic	+	
	34	Channel 7 documentary-style TV programs	+	
	28	Japanese boyfriends	+	

	30	private English lessons	+
	13	Amazing, kind people	+
	42	Yahisa-san couple & "omotenashi"	+
	32	My ex-students at W*	+
	41	Teachers of W*	+
	1	"omoiyari" consideration for others	+
	4	W*	+
	50	study abroad at X*	+
	56	EAP Japan	0
	17	Japanese school life	+
	39	Life goal	+
	3	English teaching	+
	7	Y*	+
	6	Z*	+
CL4: How I became interested in Japan.	40	First trip to Japan with aunt	+
	57	Tokyo guide book	+
	47	"Memories of a Geisha"	+
	53	Japanese dramas	+
	55	J-pop	+
	54	high school friends who loved Japan	+
	49	Utada Hikaru!	+
	52	Japanese art - ukiyoe presentation	+
	64	Japanese economy essay	+
	51	Sailor Moon!	+
	63	Doraemon manga in Vietnamese	+

*連想語で個人に係る固有名詞が記された部分は記号で記す。具体的には、協力者Bの居住地を「U」、居住地を「V」、卒業後初めて常勤職を得た職場を「W」、大学在学中に交換留学で在籍した大学名を「X」とした。また、協力者Bが通学していた大学院名を「Y」、現在勤務している職場を「Z」とした。それ以外はすべて協力者Bの記載のみである。

PAC分析インタビューは基本的に、調査協力者がまず各CLの印象について述べ、次にCL間の共通点や相違点についての印象を自由に話す順番で進む。本調査では、まず、各CLの印象について、協力者Bは、CL1「伝統的な日本」は、このCLに表れた連想語は、観光に近い日本文化だとし、外国から日本へ遊びに来た友人のために毎月のように日本の名所案内をしていて、日本を紹介するのに喜ばれる案内用の行程をいくつか自分で開発したと述べた。CL2の「普段の生活」は、協力者Bの日本での普段の生活が連想語に表れていると評価した。具体的には、現在の居住地の地形や気候などが自分に合っていることや、おしゃれに関心が高い協力者Bにとって日本のファッション文化が合っていると感じていること、外食、コンビニ弁当、100円ショップの活用などの面から日本の日常生活における食文化と行動様式が協力者Bに合っていると感

じていることを語った。CL3には協力者Bにとって多種多様な連想語が表れたようで、タイトルの「Interaction with Japanese people」という語は、協力者Bが思いつくまで時間を要した。「Japanese have a good impression of Vietnam」や「You look Japanese」「Hard-working work ethic」などは協力者Bと日本人との関係に関するもので、ここではこれまでに接触した日本人の名前が具体的に挙げられ、そこで「おもてなし」の意味がわかったことなど、具体的な経験についてのエピソードが語られた。またテレビを活用して漢字語彙を拡充する学習を続けた結果、漢越語の特徴に気づいたことなどが語られた。CL4「How I became interested in Japan」では、協力者Bのおぼとの初めての日本旅行の具体的なエピソードを挙げ、その旅行が日本を好きになるきっかけになっていると語った。また、「Memories of Geisha」「Utada Hikaru!」などの連想語から、おぼや高校のときの友人が紹介してくれ、インターネットではなく本や漫画から得た情報は日本が好きであるとし、これらの連想語を見ると、本や漫画を読みながら日本について想像している少女の自分を思い浮かべるとした。

このように各CLは、調査協力者の個別具体的な経験に関する連想語で構成されており、2つのCLは日本の伝統的な側面と日常的な側面として整理され、1つは協力者Bが日本人と接触する中から得た知見、もう1つは協力者が日本好きになった様々なきっかけについてのまとまりになっている。

次にCL間の関係について見る。CL1「読む」とCL2「普段の生活」はCL1が休日のことでCL2が日常のことという点で違いがあるが、共通しているのは日本でしか経験できない「日本文化」であるとした。次にCL1とCL3の「Interaction with Japanese people」は、共通点はどちらも日本でしか経験できないことにあるとし、一方相違点はCL1が日本の伝統的な文化を表しているのに対し、CL3は日本や日本人と実際に接触して得た「いい経験」であると述べた。またCL1とCL4「How I became interested in Japan」については、両者とも日本の文化に関するまとまりである点が共通しているが、CL1が日本を好きだということに対する現在の理由であるのに対し、CL4は日本が好きになった過去の理由であるとした。

次に、CL2とCL3は両者とも日常生活に関するまとまりであるが、CL2は協力者B個人の日常的な生活に関するものであり、CL3は日本人との接触と関係した生活に関するものとした。CL2とCL4は、「日本の文化」という点で共通しているが、CL2は日本で実際に経験して感じていることで、CL4はアメリカにいたころ、日本の生活はどのようなものかと想像していたことという点が異なるとした。CL3とCL4は、CL2とCL4の関係に似ており、CL3は日本人と接触して日本人とはどのような人たちなのかについて理解したことで、CL4は本やドラマ、教科書などを通してイメージした日本、日本人であるとした。

調査協力者はCL全体を「Why I love Japan」とし、協力者B自身が伝統的な日本と典型的な日本の生活の両方を経験していると述べた。

CL間の関係についての発話から、実際に日本に住み始めてから、友人たちに紹介するパッケージとして表現できるほど、伝統的な日本のイメージを協力者B自身なりに解釈できるように

なっていて (CL1)、同時に日本人の典型的な日常生活を送っていると認識するに至るほどの日本の日常生活のイメージ (CL2) を持っている。その日本に住んで得られたイメージは、おばや友人から紹介されて日本に関する情報に触れて日本を好きになったという日本に住む前の様々な経験 (CL4) と、日本に来て実際に経験した、日本社会や日本人との個別具体的な経験 (CL3) と融合することで、協力者 B の日本が好きだという姿勢を支えているのが見えてくる。

以上の意識や経験が調査協力者の現在とどのように関係しているかを丁寧に見ていくために、TEM 図を描くためのインタビューを二回実施した。次節ではこれらのインタビューを踏まえて作成された TEM 図を示し、分析を行う。

4.2 TEM 図に基づく分析

4.2.1 分析のための枠組み

まず、TEM 図を描く上で必要な概念は、等至点 (Equipoint: EFP)、両極化した等至点 (Polarized Equipoint: P-EFP)、分岐点 (Bifurcation Point: BFP)、必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)、社会的方向付け (Social Direction: SD)、社会的助勢 (Social Guidance: SG) の 5 点である (安田・サトウ、2012)。本研究における概念の意味は表 3 の通りである。

表 3 TEM 図に関わる諸概念と本研究における具体的意味

概念	本研究における具体的意味
等至点 (EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて生きること
両極化した等至点 (P-EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて生きることを諦める
分岐点 (BFP)	① フランス語教師になることを考える ② サマーコースに参加して韓国生活を試す ③ 大学を卒業、日本に 2 年滞在して経験を積もうと考える ④ 日本でよりよく働くことを考える ⑤ 博士課程に進学するか考える ⑥ 進学しない
必須通過点 (OPP)	① 日本がいいと思う ② 日本でやっていける、日本で生活していきたいと思う
社会的方向付け (SD)	① JET に不合格 ② 東日本大震災 ③ 新しい仕事にアプライしないといけない
社会的助勢 (SG)	① 日本が自分に合うという感覚 (音楽やファッション等) ② 姉的存在のおば ③ 面白い教師 ④ 日本好きな友人 ⑤ 交換留学制度 ⑥ フランス文化は自分になじまない ⑦ 日本語の授業の面白さ ⑧ 秩序のおかげで安全 ⑨ 日本人の秩序と優しさ ⑩ 日本の町は清潔

- | | |
|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ⑪ (日本オフィスの) 留学中のサポートがきめ細かい ⑫ 知人がいて秩序がある日本 ⑬ 秩序のある社会が好き ⑭ 友人の振舞いや支援 ⑮ 家族の支援 ⑯ 教員や生徒との関係がよい ⑰ 公私ともうまく行く ⑱ 自己啓発の本を読む ⑲ 色々な教師と出会い、ネットワークが広がる |
|--|--|

4.2.2 日本・日本語と関わって生きることに對する協力者 B の意識の変容

協力者 B が EFP「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至るまでの経験を TEM 図 (図 2) に表し、TEM 図の全体像を下の第 I 期から第 IV 期の 4 つの期間に区分した。

- 第 I 期 ベトナム・アメリカー幼少期ーアメリカの大学でフランス語を学びフランス語教師になることをやめ、日本への関心を高めるまで
- 第 II 期 日本国内・アメリカ国内ーおばとの日本旅行から居住地として日本がいいと思うまで
- 第 III 期 日本国内・アメリカ国内ー居住先として日本がいいと決めてから、日本で生活していけると思うまで
- 第 IV 期 日本国内ー日本で生活していけると思ってから現在まで

各区分ごとに、表 3 で表した BFP ①～⑥の分析結果を中心に、協力者 B の語りを記述する。

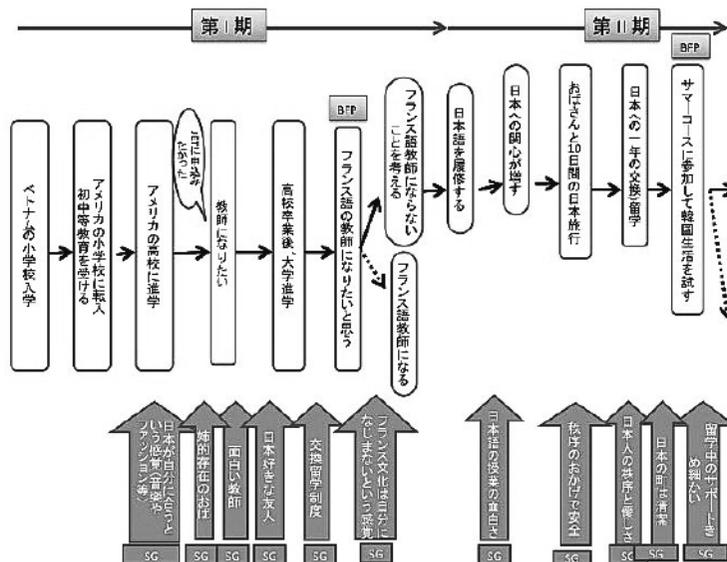


図 2-1 協力者 B の TEM 図 (1/3)

学に入るときに、家族全員がアメリカにきた。その頃から、「ランマ 1/2」や「犬夜叉」などの漫画をベトナム語や英語で読み始めた。学校では英語、家庭内ではベトナム語を使用した。ベトナム語は、香港や台湾のドラマをベトナム語吹き替えで見て、母語保持を図った。

高校生になってからは、J-POP や漫画、アニメの情報が一気に生活の中に入ってきて、宇多田ヒカルが好きになった。日本語学習に関しては、高校2年 (eleventh grade) のときに図書館で日本語の教科書のようなものを借りて日本語の発音を独習した。しかし特に日本語が勉強したいという気持ちにはならず、その本を読む程度にとどまった。

高校2年のときに受けた文化の授業でグループプロジェクトがあり、African Art, Chinese Art, Japanese Art などの中で、協力者Bのグループは Japanese Art に関心があったため、発表に向けて、カーテンを活用して着物を作ったりした。高校3年のときは英語で research paper を書かなくてはいけなかったが、協力者Bは日本の経済復活をテーマにして取り組み、とても面白かったと感じている。

また、当時同居していた、協力者Bにとってお姉さんのような存在であったおばから、JET プログラムの話聞いて、大学を卒業したら挑戦したいとも思っていた。

大学では、将来フランス語教師か歴史の教師になりたいと思っていたため、高校時代に学習したフランス語の学習を継続し、中級フランス語の授業やフランス映画の授業を受けたが、あまり面白くなかった。

大学在学中に留学をしようと思っており、行先としてフランスか日本を考えていたが、前述のフランス映画の授業で、フランス映画が自分の文化になじまないと感じる経験をした。それで、フランスに行かないことを考え始め、1年生の終わりに、Elementary Japanese の集中授業を履修したところ、大変楽しめたので、フランス語も履修を継続したが、日本語の履修も継続することにした。

このようなコンテンツへの関心の違いから、フランスよりも日本への関心が高まり、留学先を日本にした。日本の大学のうちXを選んだのは、Xに1年留学しても大学を4年で卒業できるからであった。

第II期 日本国内・アメリカ国内—おばとの日本旅行から居住地として日本がいいと思うまで：

BFP ①～③

2007年12月に、留学先である日本の生活を見えるために、おばと10日間日本を旅行した。この旅行でホテルを探して道に迷っていたときに、道を教えるだけでなく、ホテルまで連れて行ってくれた日本人に出会ったり、京都でお寺を探していたときに道を教えてくれた高齢の日本人に出会ったり、温泉地で予約していた旅館をキャンセルするときのおかみさんの対応が非常にやさしくてよかったですし、日本人のやさしさや親切な態度に触れる経験をした。

日本への1年の留学では、先にサマーコースを受け、とても楽しかった。楽しかったのは、同じメンバーが1日5時間くらい一緒にがんばっていこうという雰囲気の中で学習できたからだ

思う。苦しいけれど集中してがんばるという学習スタイルが協力者 B に合っていた。また、週末に富士山に登ったり、茶道体験や相撲見学ができたりといった文化プログラムがあるのもよかった。個人で選択して出かけることもできるが、グループで行動するという経験が協力者 B にとって新鮮で、良いと思った。

サマーコースを終えて本格的な留学生活に入ってから、日本語のクラスはサマーコースほど楽しめなかったが、他の講義科目が充実していた。英語による講義があり、日本人学生と一緒に取り組むプロジェクトワークもでき、授業の外で日本人学生と一緒に発表の準備をしたり、他の国からの留学生とディスカッションをしたりできたのがよかった。また、送り出し校が設置しているセンターの留学生サポートがきめ細やかで手厚く安心できた。そして、公共交通機関が発達していて、車がなくても移動が楽であると感じた。協力者 B はアメリカで友人が車の事故に遭ったのを見て、自身は絶対に車を運転しないと決めており、日々の移動を徒歩やバスで行っていたが、治安の面でも便利さの面でも日本は楽だと感じた。このような日本の住みやすさは、10日間の初来日の際の印象と変わらなかった。

1年の留学を終えて一旦帰国し、翌年には韓国のサマーコースに参加し、韓国語と modern history、経済の授業を履修した。サマーコースへの参加を決めたのは、日本留学と同じで、韓国のドラマと音楽が好きだったので、日本で就職などができなかつたら、韓国で生活する可能性もあるかもしれないと考え、韓国での生活の感覚を少し確かめたいと思ったからであった。しかし、実際に行ってみると、日本で就職できなかつたら韓国で生活するという気持ちにまではなれなかった。1年の日本留学で構築したような人的ネットワークがないことや韓国語があまり話せないということもあったが、住みたいと思える雰囲気がなかった。韓国は日本よりもベトナムに近く、人がおおらかだが、秩序だっていないと感じた。少しずつみなぎりを付けて、きれいな町に住もうという雰囲気に支えられた、ある程度のきれいさが町にないし、送り出し校が設置しているセンターの留学生サポートも、日本ほどではないと思った。こういうことは良しあしでなく、自分に合っているかどうかであるが、その意味では日本のほうが自分に合っていると協力者 B は感じた。

(2) 第三期 日本国内・アメリカ国内一居住先として日本がいいと決めてから、日本で生活していけると思うまで：BFP ③～④

高校のときに将来の職業として思い描いていたフランス語の教師は、フランス文化が自分に合わずやめたが、人に教える仕事に就きたいと思っていたので、高校や大学時代に好きだった歴史の先生を思い浮かべ、歴史の教師になることを考えた。

大学卒業後、日本に2年間滞在して経験を積もうと考え、JET プログラムに申請したが選考から外れ、日本国内の英会話学校への就職活動もうまくいかなかった。しかし、日本行きはあきらめられず、留学中に会った日本在住のベトナム人の友人を頼って渡日し、しばらくの間同居させてもらった。渡日後、英会話のアルバイトをしていたところ、知人の口利きで、W の英語の

常勤講師の職を得ることができた。Wは、教員や生徒との関係がよく、給与は安かったものの住居が安価で与えられたので安定した生活を送ることができた。そして、日本でやっていけるといふ自信が付き、ずっと日本で生活していきたいと思うようになった。

(3) 第Ⅳ期 日本で生活していけると思ってから現在まで：BFP ④～⑥

Wには常勤として2年勤務し、その後は専任教員として3年勤務した。ずっと働き続ける気持ちはあったものの、協力者Bは、自分には言語学の知識がなく直観と経験で教壇に立っているところがあるので、専門知識を得て効率よく英語を教えたいと思うようになり、大学院進学を考えるようになった。進学先にYを選択したのは、経済的な側面とネットワークの側面の両方の理由がある。日本で働き続けることを考えたとき、もう一つの進学先の候補の大学院よりもYのほうが、ネットワークが構築できるなど、自分のためになると考えた。大学進学後はWの専任職を辞したが、両親に経済的負担はかけたくないので非常勤として勤務することを希望した。しかし、結局Wとスケジュールが合わず、非常勤で勤務することは実現しなかった。

その後、Wで知り合った先生の縁でZへの勤務が決まった。大学院の単位はZの勤務が始まる前までに相当数を取得していたため、Zでの勤務が始まっても大学院での研究と両立できた。ZではWのように生徒に教えるのではなく、教員に教える業務にあたっているが、より広く、影響力を発揮できる仕事なので、それもいいと感じている。博士課程に進むことについても考えたが、研究よりも人に教える仕事をしたいので進学しない方向を選択した。現在の仕事は期限付き契約なので、新しい仕事を見つけていかななくてはならないが、日本や日本語と関わりを持って生き続けよう、また生き続けられると思っている。

4.2.3 日本・日本語と関わって生きることに對する協力者Bの徑路に影響を与えたSDおよびSG

本節ではどのような経験が日本・日本語と関わって生きることに影響を与えているのかを考察するために、協力者Bの意識の変容に影響を与えたと思われるSDとSGを見ていく(表3)。

まずSDは、日本で働き生活するという強い希望の実現を阻害した要因である。協力者Bにとっては、「JETに不合格」と「東日本大震災」「新しい仕事にアプライしないといけない」の3つがSDである。

まず、「JETに不合格」についてである。協力者Bにとって、高校生のときにおばから教えてもらったJETプログラムの情報は、協力者B自身もウェブサイトなどに掲載されているJETプログラムの経験談などからさらに情報を得て、日本に魅かれる一つの要素となっていた。フランス語教師や歴史の教師になることも検討したが、協力者Bは大学卒業後、まず2年ほど日本での生活を経験したいと思いJETプログラムに申請する。しかし、選考から漏れてしまったため、Bが日本と関わるのを阻害する要因となり、SDとして位置付けた。

次に、「東日本大震災」は、協力者BがWへの就職が決まる直前に起きた。アメリカにいる家

族は協力者 B が日本に続けることを心配した。協力者 B の人生がうまくいっていなかったら強く帰国を促したかもしれなかったため、これも SD とした。しかし、そのときは人生がうまくいっていたことなどから、この SD によって協力者 B が帰国する結果にはならなかった。

最後に、「新しい仕事にアプライしないといけない」である。Z の契約は 2019 年 3 月までなので、更新申請をしなくてはならないが、職場自体に変化があるかもしれないので不確定な部分が大きく、新たに仕事を見つけなくてはならない結果となる可能性がある。もしそうなれば協力者 B が日本で生活を続けることを阻む要因になるため、SD と位置付けた。

一方、SG は「日本が自分に合うという感覚（音楽やファッション等）」、「姉的存在のおば」、「面白い教師」、「日本好きな友人」、「交換留学制度」、「フランス文化は自分になじまない」「日本語の授業の面白さ」、「秩序のおかげで安全」、「日本人の秩序と優しさ」、「日本の町は清潔」、「（日本オフィスの）留学中のサポートがきめ細かい」、「知人がいて秩序がある日本」「秩序のある社会が好き」「友人の振舞いや支援」「家族の支援」「教員や生徒との関係がよい」「公私ともうまく行く」「色々な教師と出会い、ネットワークが広がる」がある。これらの SG は、本人が自身の価値観に気付くことにつながるに影響を与える SG、日本社会に関わる SG、日本語学習を開始、または継続に関わる SG、制度に関わる SG、人間関係に関わる SG、の 5 つに分けられる。

まず、本人が日本と関連する自身の価値観に気付くことにつながるに影響を与える SG には「秩序のおかげで安全」「秩序のある社会が好き」「日本の町は清潔」がある。ベトナムで小学 3 年まで育ち、その後アメリカで育った協力者 B は、将来の居住先として、この 2 地域の他に日本、韓国を候補として考えていて、4 地域とも実際に生活して自分に合った住みやすさがあるかどうかを「確認」している。その中で鍵になっているのが「秩序がある」かどうかで、秩序がある社会のほうが「自分には合っている」と考えている。そして、協力者 B は「（日本はちょっと厳しいところがあって、ちょっとずつみんなが我慢しているが、）そっちのほうがいい」また「みんながちょっと我慢していい社会、安全な社会で暮らせる」のがいいと考え、将来も住み続ける場所として日本を選択した。「日本の町は清潔」は上述の「秩序がある」と関係がある。日本人は「みんながちょっと我慢」して町を一定きれいに保とうとしており、その結果、町が清潔だと肯定的な評価をしている。

「日本が自分に合うという感覚（音楽やファッション等）」は高校時代の体験として語られており、それまではファッションなどに興味がなかったが、日本の音楽やファッションに出会い、それらがいいと感じ、自分に合うという感覚を持ち始めた。一方、高校時代にフランス語を学んでいた協力者 B は、フランス語の教師になる可能性を考えて大学でもフランス語の履修を続けたが、授業でフランス映画を見たときに「フランス文化は自分になじまない」と感じ、フランス語教師にならないことを考え始めるきっかけとなった。このどちらも協力者 B にとっては自分の嗜好に気付くきっかけとなっており、また、その嗜好は協力者 B が日本と結びつく要因となっていることから、本人が日本と関連する自身の価値観に気付くことにつながるに影響を与える SG に分類することとした。

また、日本社会に関わる SG には「日本人の秩序とやさしさ」「日本の町は清潔」、「(日本オフィスの) 留学中のサポートがきめ細かい」、「知人がいて秩序がある日本」がある。

協力者 B はベトナム人の家族と一緒にアメリカで育ってきた。インタビューの中では日本人の特徴はアメリカ人との対比で「アメリカ人は結構皮肉、sarcastic じゃないですか。私、それあまり好きじゃないんで、ほんとに、素直、sincere は人が好き」、「友達もみんな結構素直」で安心でき、居心地がいいと話した。その背景として、生まれがベトナムで、家族も結構 conservative だということがあったとした。留学前の、おぼとの 10 日間の日本旅行で触れた日本人のやさしさなども、協力者 B が名前と顔が一致する関係の中で形成したイメージでなく、一般的な日本人の印象を形成したイメージなので、日本社会に関する SG と捉えると、ここに入ると考えられる。前掲の PAC 分析の連想語には「hard-work ethics」というのがあるが、これもアメリカとの比較で、向こう(=アメリカ)は 5 時に帰る(=退社する)が、「日本はほんとにちゃんと最後までやる」とし、「そういう考え方は好きだな」「私もそういう人だから」とし、日本社会の全体的な印象として語られているので SG とした。

「知人がいて秩序がある日本」については、将来の居住先として検討した韓国との対比で語られたが、秩序があることに加え、協力者 B が日本留学以前の知り合いが日本におり、加えて 1 年強日本に留学した結果日本での人的ネットワークが広がったことが要因にある。「(日本オフィスの) 留学中のサポートがきめ細かい」も韓国との対比で語られたが、仕事のきめ細かさや対応の早さについては、アメリカの DMD (department of motor vehicles) のサービスとも対比して日本を肯定的に評価しているので、日本社会に関する SG としたい。

日本語学習を開始、または継続に関わる SG は、「日本語の授業の面白さ」で、特に中級レベルまでの日本語学習についての発言から捉えられる。協力者 B は大学に入学してから日本語を履修しているが、「すごく面白かった」「先生の教え方もすごくわかりやすかった」「教科書、すごい好き」だったとした。日本語母語話者の TA と非母語話者の TA についても言及し、日本語を勉強するときのアドバイスや漢字学習についてのアドバイスをしてもらえ、漢字を勉強するときの「音に関しての awareness」があったと発言した。現在は JLPT の N1 合格を一つの目標に据えて日本語学習を継続している。協力者 B にとって、日本で生きていくのに日本語学習は「絶対必要」で、仕事で様々な書類を扱うときに「漢字が読めてよかったっていつも思っ」ており、今も漢字学習を継続していると話した。協力者 B がたまに会う、日本に住んでいながら日本語が話せない、読めない外国人について「よく生きているねー」と思うと話した。このような日本語学習への関心の高さや学習の継続は、協力者 B を日本に結びつけ続ける SG となっていると捉えられる。

制度に関する SG は「留学制度」である。協力者 B は日本の文化に関心を持ち、日本への留学を考えるようになるが、大学入学後に交換留学制度があることを知り、実際に日本留学を選択する。また留学先についても 4 年間で卒業できるところを意識的に選択しており、将来仕事や居住の候補地と「確認」することと、4 年で学位を取ることの両方を視野に入れたときに交換留学制

度は協力者 B の人生の中で肯定的に評価される仕組みであり、その制度の存在は協力者 B が日本で生活する径路を進む要因となったと言える。

最後に、人間関係に関する SG は、「姉的存在のおば」、「面白い教師」、「日本好きな友人」、「友人の振舞いや支援」「家族の支援」「教員や生徒との関係がよい」「公私ともうまく行く」「色々な教師と出会い、ネットワークが広がる」がある。

まず、協力者 B は、アメリカで同居していたお姉さん的存在のおばから、JET プログラムの話聞いたことがきっかけで JET プログラムについてインターネットで調べて魅力を感じ、将来 JET プログラムで来日する希望を持つようになる。また、日本留学が決まった後で、日本での生活の様子を体験して確認するために 10 日間ほど日本に来て日本に好印象を持つに至っているが、その際の同伴者が協力者 B のおばであった。協力者 B は、おばのことを「クールな感じ」で「憧れました」とも述べている。「姉的存在のおば」は協力者 B にとって、渡日の遠因であり、日本を居住先として選択する端緒を作ったキーパーソンである。

「面白い教師」は前述の日本語学習に関する SG とも関連する。協力者 B は将来の職業としてフランス語の教師、歴史の教師などを考えた時期があったが、どれも習った先生の個性に影響を受けていた。日本語学習についても、大学 1 年の終わりに履修を開始した日本語クラスの担当教員や TA、留学直後に参加したサマーコースの日本語クラスの教師が楽しい授業を展開していたことが、日本語学習を継続する重要な要因となっている。

「日本好きな友人」は、特に高校に入ってから出会った友人について言及があった。高校に日本好きの友人が相当数おり、主に漫画やアニメを貸してくれる友人、また J-POP、漫画とアニメ、ドラマに詳しい友人が何人もいたと述べている。日本語学習を開始していない時期に宇多田ヒカルが好きになり、図書館で日本語の本を借りて発音について独習を開始するきっかけになった。

一方、「友人の振舞いや支援」の「友人」は主に日本人についてで、「友達もみんな結構素直」で安心でき、居心地がいい」と話している。前述の日本社会に関する SG と重なるが、ここは顔と名前が一致する関係の中で語られたので、人間関係に関する SG としたい。

「家族の支援」は、例えば、協力者 B が本を買うことを躊躇しているときに、父親が「本を書くのにみんなすっごい時間をかけて知識をお前に与えてくれる。だからそのお金は（高くなく）気にしないで異い」と後押しされ、その後本を買うことを迷わなくなったと述べている。また、協力者 B は、留学がうまくいかどうかわからない段階で自分が渡日し、日本社会に飛び込んでいった背景に、母親の性格に影響を受けたところがあるとした。具体的には協力者 B の両親は協力者 B が小さいときにアメリカに移住し、仕事も何回も変わっていて、もしその状況に対する不安を両親が表面に出していたら協力者 B に影響を与えていたと思うと語った。けれども、実際には母親は「すごいなんとかなる一っていう人」であり、本当は不安だったとは思ものの、全然その不安な感じが感じられなかったと協力者 B は述べている。このような両親の日々の態度や協力者 B への言葉がけは SG として捉えられる。

さらに、「教員や生徒との関係がよい」「公私ともうまく行く」は、大学卒業後渡日して勤務

したZでの日々のことである。ここでの経験の中で協力者Bは、OPPである「日本でやっていける、日本で生活したいと思う」という段階に至る。したがって、「教員や生徒との関係がよい」「公私ともうまく行く」というSGは、協力者Bの径路において重要な要因となっていると言えるだろう。

最後に、「色々な教師と出会い、ネットワークが広がる」は、Wで人間関係や、進学先Yを選択したときの背景、またZの採用のきっかけを指しており、協力者Bの人間関係に関するSGである。

このように協力者Bの人間関係のSGは、協力者Bがたどった径路の様々なところでエピソードとして言及されており、協力者BがOPP、EFPに至る大きな要因になっていることがうかがえる。

5. 考察

本稿はPAC分析インタビューとTEMにより協力者BがEFP「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至る径路を分析し、日本・日本語と関わって生きることに對する調査協力者Bの径路に影響を与えたSDおよびSGを捉えた。

協力者Bは小学生時代にアメリカに移住し、居住先の交通事情や徒歩による移動の際に感じる治安の悪さ、また現地の人のコミュニケーションスタイルへの違和感もあって、将来の職業に加え、将来の居住先を意識的に探し、ベトナム、日本、韓国を候補としながら、現地が自分の生活スタイルに合っているかどうかを実際の体験を通して繰り返し確かめてきた。その径路の中で、要所所で各SGが、協力者Bのたどる径路に大きな影響を与え、SDの影響を低減しているのが見えてくる。

OPP「日本がいいと思う」に至るまでは、人間関係に関するSG「姉的存在のおば」、「日本好きな友人」があって、日本に関心を持つようになり、日本語学習を開始、または継続に関わるSGと人間関係に関するSG「面白い先生」に後押しされて日本語力を中級レベルまで引き上げ、その後はより自律的に日本語を学ぶようになっていく。また日本留学や韓国のサマーコースの参加を通して将来の居住先として日本を選択するが、そこには日本社会に関するSG「日本人の秩序とやさしさ」「日本の町は清潔」、「(日本オフィスの)留学中のサポートがきめ細かい」が効いている。

OPP「日本がいいと思う」の後の、大学卒業後のBFP「大学を卒業、日本に2年滞在して経験を積もうと考える」の後、SD「JETに不合格」となるなど、就職探しが順調にいかず渡日が危ぶまれるかもしれないという時期でも、母親の「なんとかなる」という楽観的な姿勢に影響を受けて、事態を前向きに捉え、渡日を果たす。W就職直前には「東日本大震災」、W就職後も「新しい仕事にアプライしないといけない」といったSDがあるが、BFP「日本でよりよく働くことを考える」ようになり、本は買うに値するという父親の励ましに支えられて、自己啓発本をよく

読むようになり、人間関係に関する SG「色々な教師と出会い、ネットワーク」を広げていき、OPP「日本でやっていける、日本で生活していきたいと思う」を通過する。

このように、協力者 B は、いくつかの SD を、人間関係に関する SG によって軽減し、日本社会に関する SG に影響を受けて、日本で日本語を使って生きることには確信を持つに至る。

協力者 B は、日本で生きていくには、「日本語は絶対に必要」と述べ、現在も自律的に学習を継続しているが、仕事や大学院生活を送りながら自律学習を継続することが可能になった背景には、日本語学習に関する SG に支えられていることも見て取れる。

大学を4年間で修了し、日本で生きることを「確認」するのに必要だった「留学制度」を活用した生活の中で、専門科目での日本人学生や他の国からの留学生との協働学習が協力者 B の生活を豊かにしたことも明らかになった。

6. まとめ

本稿では、調査協力者1名を対象に TEA を用いて分析し、協力者 B の EFP「日本や日本語と関わりを持ち続けて生きる」に至るまでの経験と、その経験に影響を与えた社会的・心理的要因を詳細に記述した。この分析からは、日本・日本語と関係を持ち続けて生きる選択に、ある時期までは日本語学習が協力者 B にとって重要で、日本で生きていく自信をもたらすための欠かせない要素となっていることが見えてくる。それと同時に、日本人のコミュニケーションスタイルや行動様式が協力者 B にとって「居心地の良さ」をもたらすものであったということが重要な要因となっており、また、「居心地の良さ」を感じるだけでなく、「日本でやっていける、日本で生活していきたいと思う」点に至るには、協力者 B にとって、人間関係に関する様々な SG が関与していたこともわかった。

入管法の改正（入国管理局、2018）を受けて、日本語教育の領域からは、日本語教員の専門性についての声が大きくなっている（石井、2019）。本研究は、日本社会が迎える日本語非母語話者にとって日本語教育のさらなる充実が必要なことを支持する結果になったが、それに加え、日本社会と向き合って生きていく、生きていけるという確信を非日本語母語話者が持つに至るには、日本社会に関する SG や、人間関係に関する SG が重要な働きをしていることを明らかにした。日本語教育に従事する者は、単に日本語教育の提供のみを考えるのではなく、こうした SG に対する理解を深め、その必要性について、受け入れに関わる多くの人々や機関に広く伝えていくことも肝要であろう。

注

本研究は科学研究費「「移動して学ぶ」時代の日本語教育——留学体験の意味づけの変容」（基盤（C）課題番号 16K02824）の研究活動の一部である。

参考文献

- JACET SLA 研究会（2000）『SLA 研究と外国語教育』リーベル出版.
- 有川友子（2010）『日本留学のエスノグラフィー — インドネシア人留学生の20年』大阪大学出版会.
- 石井恵理子（2019）「新年のご挨拶」日本語教育学会ウェブサイト、<http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/12/2019shinnen.pdf>
- 佐藤正則（2015）「なぜ私は学習者のライフストーリーを聴き続けるのか 日本語教師としての私の構えを記述することの意味」館岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』ココ出版.
- 内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版.
- 日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店.
- 入国管理局（2018）「入管法および法務省設置法改正について」『入国管理局ホームページ』http://www.immi-moj.go.jp/hourei/h30_kaisei.html（2018年12月24日アクセス）.
- 文野峯子・浜田麻里・林さと子・福永由佳・宮崎妙子（2006）「日本語学習者と環境との相互作用をめぐって」『日本語教育の新たな文脈 — 学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』国立国語研究所、67-102.
- 丸山千歌（2016）「学習者要因の分析① — PAC 分析を活用した研究」徐敏民・近藤安月子編『日本学研究叢書 日語教学研究』外語教学与研究出版社、362-384.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011a）「ステレオタイプの読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するか — 日本語学習者に対する PAC 分析法による縦断的研究からの示唆 —」『日語学研究』、徐敏民編、華東師範大学出版会、203-213.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011b）「日本語学習者が読解教材から連想するイメージ — PAC 分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究から —」2011年度異文化間教育学会第32回大会、於お茶の水女子大学、2011年6月11日（発表抄録集154-155）.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2018）「ある翻訳者が自立に至る径路 — 移動して学ぶ時代の日本語教育への示唆」『日本語・日本語教育』第1号、立教大学日本語教育センター、19-35.
- 安田裕子・サトウタツヤ（2012）『TEM でわかる人生の経路 — 質的研究の新展開』誠信書房.
- 安田裕子・サトウタツヤ（2017）『TEM でひろがる社会実装 — ライフの充実を支援する』誠信書房.